九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

子どもの自尊感情と生活のあり方との関係ついての研究

兄井, 彰
福岡教育大学

須﨑, 康臣
九州大学大学院

横山, 正幸
福岡教育大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1456148

出版情報：生活体験学習研究. 13, pp.43-50, 2013-01-25. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第13号　43－50（2013）

子どもの自尊感情と生活のあり方との関係ついての研究

兄　井　　彰*　須　﨑　康　臣**　横　山　正　幸***

A Study on the Relationship between Children's Self-esteem and their Daily Life

Anii Akira*　Susaki Yasuo**　Yokoyama Masayuki***

要旨　平成20年から平成22年の３カ年にかけて、福岡県内の小学４年生、６年生、中学２年生、３年生、計44,806人を対象に実施した自尊感情（Rosenberg, M.（1965）の作成した質問紙の和訳）と生活実態（①就寝時間、②遊ぶ時間、③メディア視聴時間、④学習時間、⑤読書量、⑥友人の人数、⑦手伝いの頻度、⑧被叱責体験の頻度、⑨被称賛体験の頻度、⑩授業中の挙手・発言の頻度）について、調査を行ったデータを基に、要因間の因果関係を推定できる共分散構造分析を用いて、子どもの自尊感情と生活のあり方の関係について検討した。その結果、保護者から褒められることが子どもの自尊感情に影響を与えており、保護者が褒めることにより自尊感情は高まることが確かめられた。さらに、子どもの自尊感情は、就寝時間やお手伝い、挙手・発言行動に影響を与え、自尊感情が高いと早く寝るようになり、お手伝いを頻繁に行い、授業中に手を挙げたり、発言したりする行動が多くなることが確かめられた。

キーワード　子ども、自尊感情、生活、褒められる、共分散構造分析

Ⅰ．はじめに

自尊感情とは、「自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」（遠藤、1999）であり、「自分自身を価値あるものとして評価し信頼する感覚」と定義されている（榎本、1998）。この自尊感情は、精神的健康や良好な人間関係、学業成績、問題行動と密接に関連しているとされている（田中ら、2002）。

子どもの自尊感情については、横山（2010）が、「最近の子ども達の自尊感情は、従来、各方面から指摘されているようにきわめて低い傾向にある」と指摘するように、近年、低下傾向を示している。そして、子どもの自尊感情の低下は、不登校やいじめといった不適応問題を引き起こしているとされている（諸富、1999）。

このように子どもの自尊感情とさまざまな実体験が密接に関係していると考えられるが、特に、子どもの生活のあり方と自尊感情の関係が指摘されている（福岡県青少年アンビシャス運動推進室、2010、横山、2010）。子どもの自尊感情と生活のあり方については、①就寝時間、②遊ぶ時間、③メディア視聴時間、④学習時間、⑤読書量、⑥友人の人数、⑦手伝いの頻度、⑧被叱責体験の頻度、⑨被称賛体験の頻度、⑩授業中の挙手・発言の頻度との関係が検討され、一般的に望ましいとされる生活のあり方が多い子どもほど自尊感情が高い傾向にあることが明らかとなっている（福岡県青少年アンビシャス運動推進室、2010）。しかし、子どもの生活のあり方と自

*福岡教育大学
**九州大学大学院
***福岡教育大学名誉教授
連絡先：〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1
E-mail：aaniyi@fukuoka-edu.ac.jp

尊感情についての因果関係については、これまで実証的に検討されていない。つまり、一般的に望ましいとされる生活をすることにより、子どもの自尊感情が高まっているのか、あるいは、もともと自尊感情の高い子どもであることから、一般的に望ましいとされる生活をしているのかのどちらの関係が成立しているのかについて、検討されていないのである。例えば、保護者や大人から褒められることと自尊感情の関係について、褒められる頻度と自尊感情に相関が見られ、頻度が高いほど自尊感情が高くなる傾向が見られること（Felson & Zielinski, 1989）や、褒められる頻度が高い子どもの自尊感情が高いこと（福岡県青少年アンビシャス運動推進室、2010；簑輪・向井、2003）は明らかになっている。しかし、褒められることと自尊感情の高さのどちらが起因となっているかについては不明のままである。これまで実証されていない子どもの自尊感情と生活のあり方との因果関係について明らかにできれば、子どもの自尊感情を効果的に高めるための方策を検討する上での有効な資料となると考えられる。

そこで、本研究では、要因間の因果関係を推定できる共分散構造分析という手法を用いて、子どもの自尊感情と生活のあり方の関係について検討する。

Ⅱ．研究目的

平成20年度から平成22年度の３カ年にわたって、自尊感情と複数の生活のあり方について調査を行ったデータを基に、子どもの自尊感情と生活のあり方との因果関係について検討する。

Ⅲ．研究の方法

１．調査の対象

３カ年とも福岡県下の小中学生を対象とした。平成20年度は、小学校73校に在籍する４・６年生6,759名、中学校43校に在籍する２・３年生6,108名、およびアンビシャス広場の活動に参加している小学４・６年生1,189名、中学生２・３年生308名の計14,364名が対象であった。平成21年度は、小学校73校に在籍する４・６年生7,670名、中学校43校に在籍する２・３年生6,635名、およびアンビシャス広場の活動に参加している小学４・６年生1,189名、中学生２・３年生281名の計15,775名が対象であった。平成22年度は、小学校73校に在籍する４・６年生6,723名、同中学校43校に在籍する２・３年生6,587名、およびアンビシャス広場の活動に参加している小学４・６年生1,105名、中学生２・３年生251名の計14,666名が対象であった。表１は、調査対象とした児童・生徒の人数の内訳を示したものである。３カ年にわたる全調査対象は、合計44,805名であった。本研究では、一般の児童・生徒とアンビシャス広場の活動に参加している児童・生徒を込みにして分析を行った。したがって、調査対象は小学４年生が11,934名、小学６年生が12,701名、中学２年生が10,260名、中学３年生が9,910名である。なお、広場活動参加の児童・生

表１　調査対象の人数と内訳

平成20年度					
区　分	小学４年生	小学６年生	中学２年生	中学３年生	合　計
一般の児童・生徒	3,191	3,568	3,242	2,866	12,867
広場参加児童・生徒	605	584	208	100	1,497
合　計	3,796	4,152	3,450	2,966	14,364
平成21年度					
区　分	小学４年生	小学６年生	中学２年生	中学３年生	合　計
一般の児童・生徒	3,742	3,928	3,296	3,339	14,305
広場参加児童・生徒	632	557	156	125	1,470
合　計	4,374	4,485	3,452	3,464	15,775
平成22年度					
区　分	小学４年生	小学６年生	中学２年生	中学３年生	合　計
一般の児童・生徒	3,233	3,490	3,196	3,391	13,310
広場参加児童・生徒	531	574	162	89	1,356
合　計	3,764	4,064	3,358	3,480	14,666

徒と一般の児童・生徒は重複していない。

２．調査の実施時期

調査は平成20年度～平成22年度の３カ年にわたって実施された。

３．質問紙

調査は質問紙法によって行われた。使用した質問紙は次の２つである。

自尊感情の質問紙：これは Rosenberg, M.（1965）が作成したものを翻訳し、一部表現を修正して用いた。各質問に対する回答は「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の４件法で求めた。自尊感情得点の算出にあたっては、「とてもそう思う」を４点、「少しそう思う」を３点、「あまりそう思わない」を２点、「まったくそう思わない」を１点（但し、質問２、５、６、８、９の逆転項目については、「まったくそう思わない」を４点、「あまりそう思わない」を３点、「すこしそう思う」を２点、「とてもそう思う」を１点）と重みづけし、その合計点をもって自尊感情得点とした。

生活のあり方（生活実態）の質問紙：これは、今回の調査において、独自に作成したものである。その内容は、以下であった。

１．就寝時間（あなたは、ふだん夜は何時ごろ寝ますか）
２．遊ぶ時間（あなたは、ふだん何時間くらい外で遊びますか）
３．メディア視聴時間（あなたは、ふだん何時間くらいテレビを見たり、ゲームをしますか）
４．学習時間（あなたは、ふだん学校から帰って何時間くらい勉強をしますか）
５．読書量（あなたは、この１ヶ月間に何冊くらい本（マンガを除く）を読みましたか）
６．友人の人数（あなたは、親しい友達が何人くらいいますか）
７．手伝いの頻度（あなたは、家の手伝いすることがありますか）
８．被叱責体験の頻度（あなたは、ふだん家の人から叱られたり、注意されることがありますか）
９．被称賛体験の頻度（あなたは、ふだん家の人からほめられることがありますか）
10．授業中の挙手・発言の頻度（あなたは、ふだん学校の授業で自分から手を上げて発言することがありますか）

４．実施の方法

学校での調査は、学校において集団で、担任教師が実施した。アンビシャス広場での調査は、各アンビシャス広場へ調査票を郵送し、担当者が「広場内」で実施した。

Ⅲ．結果

１．自尊感情について

小学生における年度別にみた自尊感情得点（全10項目の合計得点）の分布状況は、図１のとおりである。この図を見ると、年度に関係なく同じ分布を示している。自尊感情得点の平均値を求めてみると、平成20年度では24.54点（標準偏差＝4.40）、平成21年度では24.48（標準偏差＝4.53）、平成22年度では24.65（標準偏差＝4.63）であった。このことから、この３カ年における小学生の自尊感情の高さには、差は見られないと考えられる。

中学生における年度別にみた自尊感情得点（全10項目の合計得点）の分布状況は、図２のとおりである。この図を見ると、年度に関係なく同じ分布を示している。自尊感情得点の平均値を求めてみると、平成20年度では22.30点（標準偏差＝4.54）、平成21年度では22.08（標準偏差＝4.59）、平成22年度では22.14（標準偏差＝4.57）であった。このことから、この３カ年における中学生の自尊感情の高さには、差は見られないと考えられる。

２．自尊感情と生活のあり方との関係について

子どもの自尊感情と生活のあり方の関係について因果モデルを作成し、校種によって因果モデルが異なることを考慮して共分散構造分析により検証した。

因果モデルは、保護者からの褒められる頻度と叱られる頻度によって自尊感情に影響を受けている関係を想定した。次に、自尊感情が就寝時間や外で遊ぶ時間といった生活のあり方に影響を及ぼしている

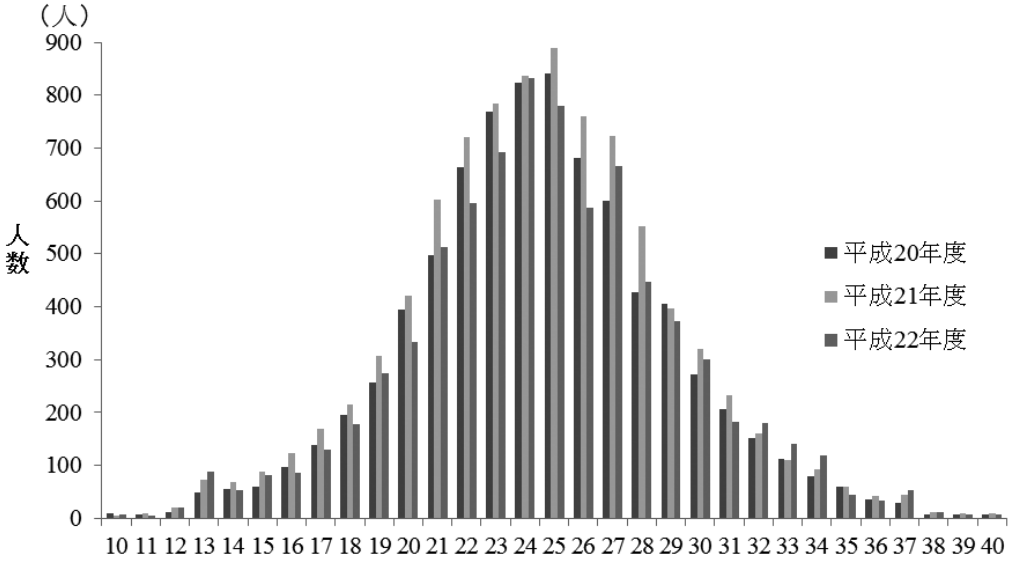

図１　自尊感情得点の分布（n=24.635）

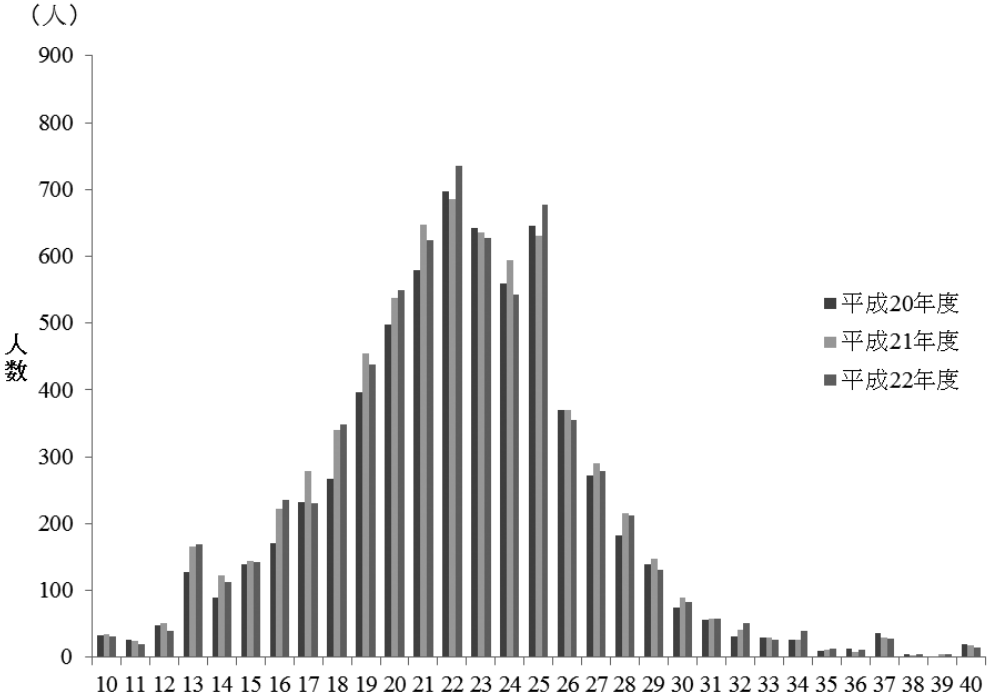

図２　自尊感情得点の分布（n=20.170）

関係を想定した。

共分散構造分析とは、観測データの背後にあるさまざまな要因の関係を分析する統計手法である（豊田、2007）。つまり、測定されたデータ（自尊感情に関する質問項目）だけではなく、直接測定されない概念（自尊感情）を含んだ、因果関係を明らかにすることができる。この共分散構造分析では、在変数や測変数を用いてモデルの検討を行うことができる。潜在変数とは直接観測されない変数（概念）のことであり、この場合は楕円で示している自尊感情になる。観測変数は直接観測される変数のことであり、この場合は長方形で示している生活のあり方の質問項目や自尊感情の質問項目のことである。また、この観測変数は潜在変数から影響を受けていることを意味する単方向矢印（以下、パスと示す）は因果関係を表し、矢印の元にある変数が、矢印の先

にある変数に対して影響を及ぼすことを仮定するものである（小塩、2008）。

このようにして構築したモデルの良さを判断するための主要な観点として、構築したモデルがデータの構造をうまく表現できているかどうかということが挙げられる（豊田、2007）。また、モデルの良さは一元的に定められるものではなく、異なる観点からモデルの良さを表現した、いくつもの適合度指標が提案されている（豊田、2007）。そこで、本研究ではGFI、AGFI、CFI、RMSEAの適合度指標から検討を行う。GFIとCFIはモデルの説明力を表す指標で、上限の値が1.0であり、.90以上の値を示すことが必要とされている（豊田、1998）。AGFIはGFIの観測変数の数が増えると１に近づく性質を修正した指標で、GFIとの落差が小さく、.90以上の値を示すことが良いとされている（小塩、2008）。RMSEAはモデルの分布と真のモデルの分布との乖離を表現した指標で、.10以上の値を示すと当てはまりが良くないとされている（豊田、1998）。以上のことから、本研究におけるモデル採択の基準として、GFI、AGFI、CFIは.90以上、RMSEAは.10未満とした。

小学生と中学生に対して想定した因果モデルについて共分散構造分析を行った結果、小学生における適合度指標は、GFI=.987、AGFI=.967、CFI=.921、RMSEA=.051であり、中学生における適合度指標は、GFI=.986、AGFI=.964、CFI=.902、RMSEA=.054であった。小学生と中学生共に良好なモデルの適合度を示していた。次に、校種別に適合度が良いことが確認されたため、配置不変性の検討を行う。この配置不変性は、校種間でモデル図は一緒でも、推定値はそれぞれ異なっていてもよいという仮説を表す（豊田、2007）。ここでは、小学生と中学生のモデルを同時に分析し、適合度の検定を行う。適合度が良い場合は、小学生と中学生の推定値の差の検定を行う。

分析の結果、因果モデルの適合度指標はGFI=.987、AGFI=.965、CFI=.913、RMSEA=.037であり、モデルの適合は良好であった。次に、小学生と中学生の推定値の差について検討を行った。推定値の差を検討する際は、差に対する検定統計量の絶対値が1.96以上の場合は５％水準で有意であると判断した（豊田、2007）。その結果、親しい友人数を除くすべての生活のあり方において有意な差が確かめられた。このことから、小学生と中学生の因果モデルの親しい友人を除くすべての生活のあり方に関しては異なっていることが考えられる。しかし、これはモデルの局所的な集団の異質性を考察しているが、モデル全体における集団間の際について言及していない（豊田、2007）。そこで、集団間で推定値に差が確かめられたパスに等値制約を置いたモデルと、等値制約を行わないモデルの適合度の検討を行い、モデル全体の評価を行った。

等値制約を置いたモデルとは、小学生と中学生のパスが等質であるということを仮定しており、等値制約を置かないモデルは小学生と中学生のパスが異質であるということを仮定している。

分析の結果、等値制約を置いたモデルの適合度はGFI=.985、AGFI=.968、CFI=.905、RMSEA=.036であり、等値制約を置かないモデルの適合度はGFI=.987、AGFI=.965、CFI=.905、RMSEA=.037であり、両モデルの適合度は同様の結果を示していた。そこで、AICの指標を参考にモデル比較を行った。このAICは真のモデルとそのモデルの近さを表す指標で、複数のモデルを比較する時に、小さな値を取るものほど良いとされている（小塩、2008）。等値制約を置いたモデルはAIC=4244.765であり、等値制約を置いていないモデルはAIC=3919.921であり、等値制約を置いていないモデルが小さな値を示していた。

以上のことから、等値制約を置いていないモデルは、相対的にモデルの適合度が良く、校種別にモデルの検討を行うことは妥当であると考えられる。また、小学生と中学生において想定した因果モデルは信頼性及び妥当性を有していることが示された。ここで想定した校種別における自尊感情と生活のあり方の因果モデルを、図３に示した。

次に、想定した因果モデルの部分的評価を行った。その結果、褒められる頻度から自尊感情に有意な正のパス（小学生：.54、p<.001、中学生：.57、p<.001）を示した。また、叱られ頻度から自尊感情に有意な負のパス（小学生：－.10、p<.001、中学生：－.07、p<.001）を示した。

また、自尊感情から就寝時間に有意な正のパス（小学生：－.32、p<.001、中学生：－.24、p<.001）、

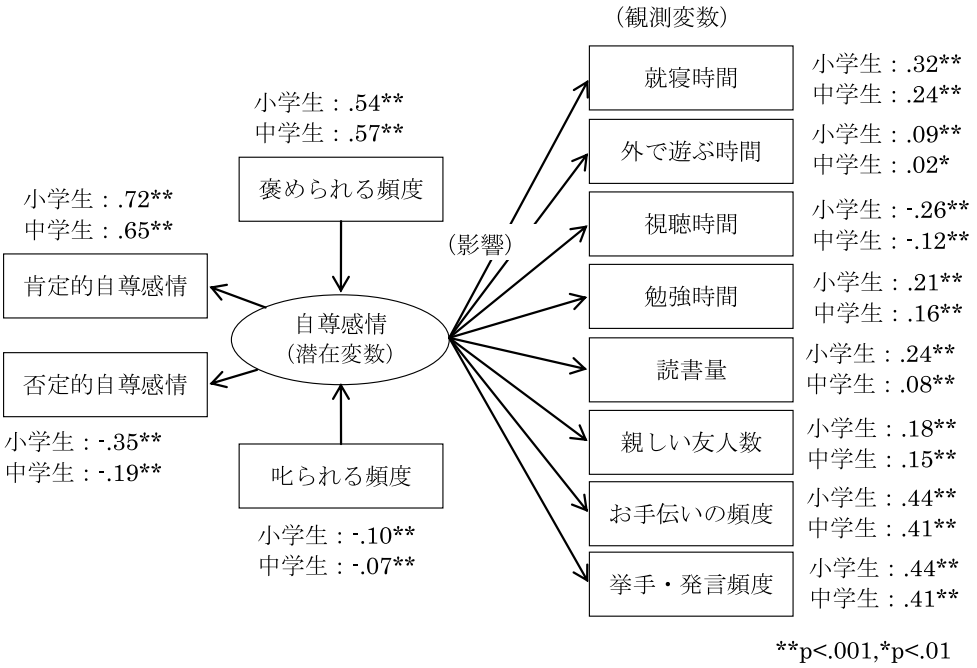

図３　校種別における自尊感情と生活のあり方の因果モデル

外で遊ぶ時間に有意な正のパス（小学生：.09、p<.001、中学生：.02、p<.01）、テレビやゲームの視聴時間に有意な負のパス（小学生：－.26、p<.001、中学生：－.12、p<.001）、帰宅後の勉強時間に有意な正のパス（小学生：.21、p<.001、中学生：.16、p<.001）、１ヶ月後に読む本の冊数に有意な正のパス（小学生：.24、p<.001、中学生：.08、p<.001）、親しい友人数に有意な正のパス（小学生：.18、p<.001、中学生：.15、p<.001）、お手伝い頻度に有意な正のパス（小学生：.44、p<.001、中学生：.41、p<.001）、学校での挙手・発言行動に有意な正のパス（小学生：.44、p<.001、中学生：.41、p<.001）を示していた。

しかし、今回の調査では、４万人を超える子どものデータであることから、わずかな違いでも統計的に有意な関係が認められた。そこで、図３において比較的大きなパス係数を示したものについてのみ結果を示す。

褒められる頻度から自尊感情に有意な正のパスが見られることから、保護者が褒めることが子どもの自尊感情に影響を与えており、保護者が多く褒めると子どもの自尊感情が高まると考えられる。

また、自尊感情から就寝時間やお手伝いの頻度、挙手・発言行動の頻度に有意な正のパスが見られた。このことから自尊感情が、就寝時間やお手伝い、挙手・発言行動に影響を与えており、自尊感情が高いと早く寝るようになり、お手伝いを頻繁に行い、授業中に手を挙げたり、発言したりする行動が多くなると考えられる。

Ⅳ．考察

本研究は、平成20年度から平成22年度の３カ年にわたって、自尊感情と複数の生活のあり方について調査を行ったデータを基に、子どもの自尊感情と生活のあり方との因果関係について検討することが目的であった。

３カ年の調査において、年度による子どもの自尊感情の差異や変化については認められなかった。このことから、この３カ年の間に、子どもの自尊感情の大きな変化は無かったと考えられる。しかし、小学生の方が中学生よりも自尊感情が高く、加齢により自尊感情の低下が見られた。この結果は、自尊感情の加齢変化について横断的に行われた研究結果（Robins et al., 2002）や古荘（2009）及び近藤（2010）の調査の結果と一致している。加齢により自尊感情が低下する理由としては、低年齢の頃は、まだ自己認識力が低く、あらゆることに対して自信を持っていたものが、加齢に伴って自己認識力が高まり、自

己の能力の限界や客観的能力を認識できるようになり（岡澤・辻、1998）、自尊感情が低下すると考えられる。また、低年齢の子どもは、重要な他者の価値あるフィードバックや賞賛、励ましなどで自尊感情が向上・維持するが、年齢が上がるにつれて仲間との比較や評価により自尊感情が低下するとも考えられる（福岡県青少年アンビシャス運動推進室、2010）。

次に、要因間の因果関係を推定できる共分散構造分析を用いて、子どもの自尊感情と生活のあり方の関係について検討した。その結果、保護者から褒められることが子どもの自尊感情に影響しており、保護者が褒めることにより子どもの自尊感情は高まることが明らかとなった。また、子どもの自尊感情は、就寝時間やお手伝いの頻度、授業中の挙手や発言行動に影響を与えており、自尊感情が高まることにより、寝る時間が早くなり、お手伝いをするようになり、授業中に手を挙げたり、発言したりするようになると考えられる。

本研究の結果は、保護者から褒められる頻度と子どもの自尊感情に正の相関が見られるとする他の研究結果（Felson & Zielinski, 1989）や、褒められる頻度の高い子どもは自尊感情も高いとする研究結果（福岡県青少年アンビシャス運動推進室、2010；簑輪・向井、2003）と一致し、褒められる頻度の高さと自尊感情の高さに関連があるという主張を（青木、2005）支持するものである。特に、本研究結果は、保護者から褒められることが、子どもの自尊感情を高めるという因果関係を明確に示していた。すなわち、自尊感情の高い子どもほど、保護者が望ましいとする行動をしているために褒められる頻度が多くなっているのではなく、保護者から褒められることに起因して、子どもの自尊感情が高まるという関係が成立していたのである。つまり、子どもの自尊感情は、保護者から褒められることにより高まると考えられる。そして、子どもは保護者から褒められることによって「つぎももっと褒められるようにがんばろう」と、褒められる体験により積極的な姿勢を生み出すと推察される（田村・石川、1998）。

そして、子どもの自尊感情の高まりと積極的な姿勢に起因して、就寝時間が早く、お手伝いが多く、授業中の挙手や発言行動が多くなるという一般的に望ましい行動を起こすことが確かめられた。特に、挙手・発言行動については、先行研究（藤生、1994）においても、挙手・発言行動の多い子どもは自尊感情が高いことが確かめられている。しかし、挙手・発言行動の多い子どもは自尊感情が高いからといって、これが直ちに因果関係を示しているのではなく、自尊感情が高いから挙手・発言にいたるのか、挙手・発言するから自尊感情が高くなるのかは明らかではないと指摘されていた（藤生、1994）。この指摘に対して、本研究結果は、子どもの自尊感情の高さが、挙手・発言行動に影響を与えているという因果関係を明らかにすることができた。このことから、子どもは自尊感情の高さに起因して、一般的に良いとされる生活あり方を示すようになると推察される。

それでは、子どもの自尊感情を高めるためには、褒めることが有効だとして、子どもを何が何でも褒める方が良いかというと注意が必要であろう。教育関係の多くの書籍で、褒めることでポジティブな効果を生じさせるという常套的な見解が繰り返されているという批判（Henderlong & Lepper, 2002）があるほど、褒め方に関しては多くの情報が氾濫している。それでは、子どもの自尊感情を高める褒め方とはどのようなものであろうか。

子どもの自尊感情は、身近で重要な人物により、褒められたり認められたりすることで、自分自身の価値や能力が内在化した結果として育つと考えられる（Brazelton & Greenspan, 2000）。また、自分自身を価値あるものとして意識し、尊重する感情である自尊感情は、家族との関係が密接に関係しており、自尊感情の形成には両親からの全面的な受容、愛情及び是認が必要である（蘭、1992）。このことから、子どもの自尊感情を高めるためには、保護者が子どもを全面的に受け入れ、認めることが前提となる。その上で、保護者と同じく子ども自身が、自分を受け入れ、認めることが必要となる。このような前提条件が無い中でいくら子どもを褒めても自尊感情を高めることはできないと思われる。

また、自尊感情を高める褒め方に関連するものとして、Brophy（1981）は、心理学の原因帰属に関する研究を整理し、効果的な賞賛（ほめ）のためのガイドラインを示している。それによると、「ほめ」を随伴的に与えることや、成果の評価を明確にするこ

と、注目すべき努力を認めることなどが示されている。そして、このガイドラインには、成功を努力と能力に帰属さるようなフィードバックを与えることにより、子どもの行動についての理解と適切な原因帰属を養うための方策が示されている。加えて、松尾（2007）も、同じく帰属理論を参考にして、子どもの内的要因に焦点を当てた褒め方をした方が、自尊感情が高まると示唆している。この内的要因とは、能力・資質や努力で、具体的な褒め方としては、「考える力があるね」「足が速いね」「絵のセンスがあるね」などの「能力・資質」を褒めたり、「よくがんばったね」「よく練習したね」など、努力を褒めたりすることを推奨している。さらに、子どもの成長や成長可能性を褒めることも大切だとしている。例えば、「すごくよくなったね」「この調子だと、もっとできるようになるよ」など、子どもに自分のできることが今後どんどん広がって行くことを感じさせる褒め方が自尊感情を高まるとしている。

以上のことをまとめると、大人が、できる限り子どもに関心を示し、見守る中で、子どもが何かに成功したり、達成できた時に、能力や努力を褒める言動を示し、子どもの可能性を信じることが大切だと思われる。さらに、教育の現場では、子どもが必要としている時に必要な指導や支援を行うことが効果的であると言われるが、子どもを褒める時も同様に、子どもが褒めて欲しいと思う時に、欲しい言動をとることが、効果的だと考えられる。

本研究では、因果モデル作成も含め自尊感情と生活のあり方の関係について検討を行った。今後は、褒めるだけでなく、子どもの自尊感情を高めるための具体的な方策について詳細な検討が必要であろう。

付記

本研究は、著者の一人が、企画・調査に関わった福岡県青少年アンビシャス運動推進室よる調査データを使用した。データの使用に関しは、福岡県青少年アンビシャス運動推進室に許可を得て、分析を行った。

引用文献

青木直子（2005）ほめることに関する心理学的研究の概観。名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学、２、123-133。

蘭　千壽（1992）セルフ・エスティームの形成と養育行動。遠藤辰雄・井上祥治・蘭　千壽編、ナカニシヤ出版、pp. 168-177。

Brazelton, T. B., & Greenspan, S. I.（2000）The irreducible needs of children: What every child must have to grow, learn, and flourish. New York: Perseus.

Brophy, J.（1981）Teacher praise: A functional analysis. Review of Educational Resaerch, 51, 5-32.

遠藤由美（1999）自尊感情。中島義明編、心理学事典、有斐閣、pp. 343-344。

榎本博明（1998）「自己」の心理学。サイエンス社。

Felson, R. B., & Zielinski, M. A.（1989）Children's self-esteem and parental support. Journal of Marriage and the Family, 51, 727-735.

福岡県青少年アンビシャス運動推進室（2010）子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究。福岡県青少年アンビシャス運動推進室特別レポート。

古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか ― 児童精神科医の現場報告。光文社。

Henderlong, J., & Lepper, M. R.（2002）The effectof praise on children's intrinsic motivation: A reviews and synthesis. Psychological Bulletin, 128, 774-795.

近藤　卓（2010）自尊感情と共有体験の心理学。金子書房。

松尾直博（2007）自尊心を育てるほめ方・叱り方。児童心理、61: ４、12-17。

簑輪早織・向井隆代（2003）叱り言葉・ほめ言葉と親子関係認知、子どもの心理的適応との関係。日本発達心理学会第14回大会発表論文集、313。

諸富祥彦（1999）学校現場で使えるカウンセリング・テクニック（上）― 育てるカウンセリング編11の法則。誠信書房、pp.123-151。

小塩真司（2008）はじめての共分散構造分析。東京図書。

岡澤祥訓・辻　朋枝　1998　運動有能感の発達傾向に関して　体育科教育、６、54-56。

Robins, R. W., Trzesniewski, K. H., Tracy, J. L., Gosling, S. D., & Potter, J.（2002）. Global self esteem across the life span. Psychology and Aging, 17（3）, 423-434.

Rosenberg, M.（1965）Society and adolescent self-image. Princeton University Press.?

田村　毅・石川洋子　1998　ほめられ体験・叱られ体験　モノグラフ・小学生ナウ VOL.18-3。ベネッセコーポレーション

田中道弘・上地　勝・市村國夫（2002）Rosenberg の自尊心尺度項目の再検討。茨城大学教育学部紀要教育科、52、115-126。

豊田秀樹（1998）共分散構造分析［入門編］。朝倉書店。

豊田秀樹（2007）共分散構造分析［Amos 編］。東京図書。

横山正幸（2010）子どもの自尊感情と体験の関係について。生活体験学習研究、10、53-62。